

令和 2 年 6 月 29 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2015～2019

課題番号：15H04560

研究課題名(和文) 東北型社会の特質に関する史的研究：地域資源の開発・管理・利用との関係を重視して

研究課題名(英文) A historical study on the characteristics of Tohoku-type society: focusing on the relationship with the development, management and utilization of local resources

研究代表者

加藤 衛弘 (KATO, Morihiro)

筑波大学・生命環境系・教授

研究者番号：70177476

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 9,800,000円

研究成果の概要(和文)：3つの課題の調査分析をした。その中心は秋田藩に広く見られる本郷 枝郷という村どうしの関係と、それらの中核にいる「親方」の役割の解明にある。

研究対象地は秋田県阿仁川の最上流にあり、近世の荒瀬村とその多くの枝郷の範囲である。親方たちは連携して耕地開発に努め、阿仁銅山の製錬用の新炭の生産を担った。阿仁銅山は荒瀬村に近接し、大量の林産物を必要とした。近代に入り、当初阿仁鉱山向け林産物の生産を数名の親方が担っていた。明治中期には、親方自身による鉱山の採掘が本格化し、同後期には、酒造や馬産において各枝郷の親方が生産活動を活発化した。近代にも同地域内の親方やその連携が地域運営に大きな役割を担っていた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

東北型社会では、特に農村社会において、親郷 寄郷、本郷 枝郷という村々連合が地域社会の運営の一端を担っている。本研究では後者を例に具体的に追究した。村の中核を担うのが、近世には村役人である肝煎・地主をつとめた親方たちであった。彼らのネットワークにより各村と村々連合が維持・展開された。

東北農村社会について、既存研究では本家・分家関係による家連合の村構造が重視されてきた。しかし、それも含みつつ、親方を中心とする村運営や、村々連合などの多重なセーフティーネットが存在し、それが重要な役割を果たしていたことが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：We conducted a survey analysis of three issues. The main point is to clarify the relationship between the villages of Hongo-Shigo, which are widely found in the Akita domain, and the role of the oyakata(bosses) at the core of these relationships.

The research site is located in the uppermost stream of the Ani River in Akita Prefecture, and it is within the range of Arase Village and its many branches in the early modern period. The oyakata worked in cooperation to develop cultivated land and were responsible for producing firewood charcoal for smelting the Ani Copper Mine. The Ani Copper Mine was close to Arase Village and needed a large amount of forest products. At the beginning of modern times, several oyakata initially produced forest products for the Ani mine. In the middle of the Meiji era, mining by miners themselves began, and in the latter half of the Meiji era, the oyakata of each branch in sake brewing and horse producing increased their production activities.

研究分野：社会・開発農学

キーワード：東北農村 本郷 枝郷 親方 秋田 阿仁 銅山・鉱山 馬産

様式 C-19、F-19-1、Z-19（共通）

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) 近世・近代農村史研究における家・村論

近世農村史研究における家・村論は、主に畿内から関東南部にかけての日本中央部の分析によって形成されてきた。そこでは17～18世紀に小百姓の家の自立と、それを構成員とする近世村の成立、領主による文書による村支配体制（村請制）が確立されたとする（水本邦彦1987『近世の村社会と国家』等）。近代農村史研究においても、こうした近世の家・村のあり方を前提に、明治の行政村成立後も近世村が自立的な「自治村落」として機能してきたとされてきた（斉藤仁1989『農業問題の展開と自治村落』等）。

### (2) 東北研究の意義

#### ①秋田藩・秋田県を中心とする研究成果

私たちは2002年以降2つの科研基盤研究(B)によって北部東北地方を調査・研究してきた。秋田・青森営林局史料を中心に関連史料を分析した藩営林、国有林の経営展開や地域社会に関する研究である。一方、金森正也(2011)『藩政改革と地域社会—秋田藩の「寛政」と「天保」—』は秋田藩の寛政改革と地域の対応を総合化した。しかし、秋田藩領の地域特性については議論せず、林野への追究はしなかった。私たちは上述した成果の中で、(1)のように一般化される地域社会像とは異なる「東北型社会」とも呼べる地域類型を秋田藩領・秋田県に見出し、領主・行政との関係、新田開発や林野等の地域資源との関係でこれを解明しようとしている。

#### ②秋田藩領域を研究する意義

私たちの研究により、秋田藩の広大な藩営林をはじめ林野全体に対する統治機構が解明され、秋田藩に代表される地域が近代に国有林地帯になることが明らかになりつつある。国有林野の分布は、歴史的経緯の異なる北海道・沖縄を除けば、東北、北関東、中部山岳地域、南四国、南九州に偏在しており、当該15県に83%が集中している。一方、地方知行制は大藩の親藩と外様藩で採用されており、藩の数では2割と少数であるが、石高で見れば半分以上を占める（J.F.モリス・白川部達夫・高野信治共編〈1999〉『近世社会と知行制』）。国有林地帯と重複部分が多い。そこには領主支配のあり方、林野掌握の方法における共通点が想定される。その特徴について本研究では地方支配と林野支配の両側面から追究したい。特徴ある支配の下では、特徴ある地域社会の存在と編成が推測される。秋田藩は両者が明確に重複しており、近・現代に継続するその特徴ある地域社会、「東北型社会」の解明は、周辺地域における現状の地域問題を考察する上でも大きな意義があるであろう。

## 2. 研究の目的

### (1) 国有林経営の展開と地域社会

秋田藩は文化期からの林政改革によって、全藩営林の経営機構・地方役所を整備すると共に、計画的な経営を模索していった。そこで作り出された資源と経営方法は近代秋田県官林にも引き継がれ、藩の山林方役人もそこで重要な役割を担ったことを研究代表者の加藤と分担者の芳賀は解明してきた。本研究においては近世の藩営林経営とともに近代における国有林経営の展開と地域社会との関係を追究したい。

### (2) 東北型農村の社会史的研究

戦後北秋田郡の社会は、福武直編1954『日本農村社会の構造分析—村落の社会構造と農政浸透—』等によって「東北型農村」の典型とされた。同族結合というタテ関係によって社会が構成され、その解消が農村民主化の鍵とする捉え方であった。その後東北でも講組関係を重視する議論が深まり、かつ兼業化によりタテの関係も薄れたとして、福武自身この類型を撤回してしまう。しかし、私たちが北秋田で調査を進めると、依然として同族関係は色濃く残り、それは村落

を越えて展開している。さらに、地方文書調査の結果、以下の事実や課題が明らかになりつつある。①肝煎家文書には村請制に関わる近世文書がほとんど見られない。②地方知行制を採用する秋田藩では、領国内の拠点に家臣団が地方配置されていた。蔵入地でも郡方役人が役屋に常駐して村々を訪ねるとともに、親郷肝煎は役屋へ頻繁に出入りしていた（金森 2011 等）。③近世村のあり方も村々の連合組織である親郷一寄郷、本郷一枝郷制が一般的に存在した。近代町村と村落のあり方をも決定づけている。調査を通じて、秋田郡北部（近代の北秋田郡）における近世社会、近・現代社会の形成とその特徴を解明する。

### (3) 近代東北型社会の形成に果たす土族の役割：『横手殖林社』を中心に

現横手市域では、横手土族を中心に「横手殖林社」という社有林が形成された。同社の経営対象となる林野は、近世には横手城付山林と呼ばれた藩営林で、横手城下の武士によって部分林が育成されていた。近代に藩営林は国有林となったが、土族は部分林経営を志向して明治 21 (1888) 年に「横手植林組合」を設立する。同 35 (1902) 年には当該林野を国有林から払下げられ「株式会社横手殖林社」に改組した。関係町村が最大株主となり、公的性格の強い会社でもある。その成立と展開を解明したい。

## 3. 研究の方法

本研究は近世から現代までを対象としており、方法は史料調査とヒヤリング調査からなる。本研究で調査対象とする主要な史料は以下の通りである。

秋田県秋田市：◆東北森林管理局文書（現国立公文書館つくば分館所蔵）

秋田県北秋田市：◆綴子・高橋家文書／○鷹巣・成田家文書／○七日市・長岐家文書／\*上杉・工藤家文書（森吉図書館所蔵）／\*米内沢・木村家文書／○本城・金家文書／\*阿仁水無・宮越家文書／◆阿仁公民館保管文書（5 件）／◆阿仁荒瀬・湊家文書

秋田県横手市：\*株式会社横手殖林社文書

◆、\*、○のマークを付けた史料は、2014 年度までの科研費研究等によって私たち自身が発掘または整理したもので、その現状を示している。◆は私たちの手によって整理・目録化を進めた史料、\*は現在整理中の史料、○は現在所在を確認した史料である。

◆史料のうち重要なものの撮影と、\*史料の整理を進め、○史料の整理に着手する予定である。2002 年から継続してきた旧秋田営林局文書・旧青森営林局文書、秋田県公文書館の調査は、課題に関係する範囲で継続する。現在進めているこれらの調査が本研究の中核をなし、その過程で調査結果の地域還元のためのセミナー、報告会、シンポジウムを適宜開催する。

### (1) 北秋田市の調査

#### ①史料調査（住民との協同による）

北秋田市での史料調査は北秋田市教育委員会等の協力を得て、住民と協働による史料調査を進めている。文書セミナーや報告会をたびたび開催している。協同による史料整理は米内沢・木村家文書、阿仁水無・宮越家文書を中心に、調査のたびに開催する予定である。

史料の発掘には住民の協力が不可欠である。古文書セミナーは、史料発掘に協力してきた住民が仲間を募り、歴史遺産でもある地方文書の住民による保存を願い開始され、継続している。木村家文書・宮越家文書とも目録入力まで終了したい。目録の完成した史料は所蔵者・管理者から利用許可を得て、写真撮影を実施する。

#### ②ヒヤリング調査

史料調査で知り得た地域社会の生産・生活構造の特質を、地域資源の開発・管理・利用を中心に調査する。史料の翻刻・解題を前提にした近・現代における地域社会・資源利用の展開について

て、史料調査を補足する側面から進める。

## (2) 横手市の調査

### ①史料調査

横手士族を中心に明治 18 (1885) 年に設立された「横手殖林組合 (後に横手殖林社)」の調査である。横手殖林社文書の整理はほぼ終えており、目録を完成させたい。これをもとに史料を体系的に把握し、取捨選択して、写真撮影を進める。

### ②ヒヤリング調査

殖林社の株主になることの意義、さらに関係する横手町と隣接する朝倉村が最大の株主になる意味を調査したい。横手町・朝倉村の農民にとって、同社有林は草肥・燃料の重要な採取地でもあった。その利用実態についても調査したい。

## 4. 研究成果

### (1) 国有林経営の展開と地域社会

2015 年度は、芳賀 (2016) が国有林経営の前提となる藩が森林資源の管理・経営を主導した秋田藩における 19 世紀林政改革の基調を論じた。藩が山林の減少に強い危機感を抱いて改革を開始し、森林資源の保護・育成のため、長期的な視野に基づく、資源の実情に見合った抽出しや、村の相続を援助する植林などが図られた。

2016 年度は、芳賀 (2017) が秋田藩の御札山制度の特徴を明らかにした。御札山とは、藩が利用を厳しく制限した山林を指す。藩は御札山に指定する際、その境界や利用制限の理由を記載した木製の「御札」を、地元の村に発行し、地元村は御札を該当する山林へ掲示した。御札山は、苗木や若木を保護して成林を促し、成林後も山林の持続的な利用を図る制度であった。また、将来の利用を林主 (村や百姓) に約束し、それを周辺村々に認知させて、盗伐などを防ぐ意義もあった。それゆえ林主は、一定期間の利用制限と引き替えに、御札の発行を藩に出願した。御札山の数は、19 世紀初頭の時点で、約 1000 か所に昇った。近代秋田杉の資源造成開始の一側面を意味する。

2017 年度には、芳賀 (2017) が国有林経営の前提となる近世秋田藩における林政の展開とその技術的な特徴を、山林資源管理の観点から学会報告し、論文に著した。同藩の林政は、用材・薪炭材の生産に留まらず、農政・民政、鉱山政策、殖産政策、人材登用策などとも密接に連動しつつ展開した。特に文化期にはじまる林政改革では、木山方役人が重要な役割を担い、「山林取立」を基本政策に、林政機構の整備、記録の作成、凶作への対応との関連に着目しつつ検討した。あわせて、藩営林の中心であった能代木山の用材林と銅山掛山の薪炭林の山林資源管理技術を分析した。この結果、19 世紀には山林資源をめぐる知識の蓄積と、それに基づく山林資源管理政策の成熟、技術の進展がみられ、これを立案・実行できる人材の登場や林政機構の整備も認められることがわかった。

### (2) 東北型農村の社会史的研究

この研究が本研究の中心となった。北秋田市では、住民と協働による史料調査を続けてきた。大小各種あるが、大きな諸家文書としては 2017 年度に米内沢・木村家文書目録 (2315 点) を完成し、2019 年度には阿仁水無・宮越家文書目録 (1610 点) を完成した。

2015 年度には、①渡部他 4 名 (2015) が、近世に肝煎を勤めた北秋田市阿仁荒瀬湊家文書の分析により以下を解明した。第 1 に、本郷一枝郷関係は非常に階層的で、枝郷の年貢・財政は本郷の肝煎だけが管理していた。第 2 に、阿仁川上流域では、耕地の開発と用水路の開削が近世後期まで続けられた。天保飢饉の影響で「他渡」耕地が増加したが、肝煎が村方に引戻す。第 3 に、

19 世紀の後半には枝郷が力をつけ、村の規約の制定の際には本郷に匹敵する役割を果たした。②芳賀他 2 名(2016)では、同じく湊家文書から阿仁銅山山麓における森林資源利用について、藩・銅山・村の三者の視点に立って考察した。銅山と山麓村々は相互依存の関係にあり、森林資源利用をめぐる両者の間には一定の均衡が保たれていたが、一方でこの均衡は危うさも内包しており、対抗関係にもあった。

2016 年度には、渡部他 4 名(2016)において、近世に形成された本郷一枝郷の広域的なネットワークが、明治初年の大区小区制のもとでも維持されたことを解明した。枝郷には伍長や惣代という代表者がおかれ、本郷の代表者と協力して村政運営にあたった。加えて注目されるのは、一時的にはあれ、複数の枝郷からなる「担」を単位に惣代がおかれたことである。

2017 年度には、渡部他 2 名(2017)にて、阿仁鉦山山麓に位置し、近世・近代の豊富な地方文書を所蔵する湊家の明治 10～20 年代の史料に着目し、村側に残された請負関係文書を分析した。請負人は地元で「親方」とよばれる村の有力者が独占的に務めていた。「親方」は近世には村役人を経験し、近代には地方名望家と位置づけられる。彼らは村に雇用の機会を作り、その労働力を組織して多額の現金収入を獲得しようとする請負業に活躍の場を求めた。

2018 年度は、渡部他 4 名(2018)において、明治後期に焦点を当て、資本主義経済成立期における東北型農村の近代化や地方名望家の果たす役割を検討した。豊富な森林資源を擁する荒瀬村において、材木と薪炭は重要な生産物である。明治 10～20 年代の林産物の生産は、阿仁鉦山向けに湊家を含む数名の親方によって担われていた。20～30 年代前半には、親方自身による鉦山の採掘が本格化した。阿仁川流域に点在する遠隔地の有力者と、村をこえた広域的な連携関係を結び、村内に稼ぎの機会を生み出した。30 年代後半には、酒造や馬産の分野で、各部落の親方が相互に連携し、新しい生産活動を活発化した。

2019 年度は、加藤他 2 名(2020)にて、湊家文書の中で同家事蹟などを合綴した明治 3(1870)年正月「勤労書上扣」を中心に分析した。天保 4(1833)年の凶作を契機に「他郷渡り」の本郷・枝郷の耕地を、荒瀬村肝煎の同家当主が中心となり買い戻した。天保 13(1842)年から郷中による用水路開削を開始するも頓挫してしまう。同人は自己資金で再開し、万延元(1860)年までに開田をなしとげた。枝郷根子村の地主(村役人)で、銅山掛山の御山守でもあった佐藤家も湊家に協力して「他郷渡り」耕地の買い戻しに尽力し、根子村ほかの耕地も開発、御山守としては銅山掛山からの計画的薪炭生産や資源造成に貢献した。

### (3) 近代東北型社会の形成に果たす土族の役割：『横手殖林社』を中心に

2017 年度に、株式会社横手殖林社文書目録(4450 点)を完成し、2019 年度までに重要史料の写真撮影を終えた。同作業がこの課題による主要な成果となった。

これをもとにした芳賀学会報告(2020)は、秋田藩支城の横手城の背後に広がる「横手御城付山林」の管理と利用について明らかにした。19 世紀前半以降、山林取立役や御林守、城代戸村家の家来らが同所での植林を進め一定の成果をあげた。横手御城付山林は面積こそ小規模であるが、山林の少なかった当該地域においては重要な存在であった。横手御城付山林では、横手城の建築用材や城下町の土木用材が伐採されるとともに、薪や山菜等も採取された。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計12件（うち査読付論文 12件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 加藤衛弘・芳賀和樹・渡部圭一	4. 巻 54
2. 論文標題 近代移行期における山村の開発と由緒：秋田藩領荒瀬村肝煎・湊家文書の解題と翻刻	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 徳川林政史研究所研究紀要	6. 最初と最後の頁 143-166
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 福田 恵	4. 巻 35
2. 論文標題 近代山村の社会学史的研究：社会結合と森林形成に関する論点と課題	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 社会学雑誌	6. 最初と最後の頁 96-127
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 渡部圭一・芳賀和樹・福田 恵・湯澤規子・加藤衛弘	4. 巻 34
2. 論文標題 明治中～後期山村の生業と地域ネットワーク：旧秋田藩領荒瀬村肝煎・湊家文書の解題と翻刻	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 筑波大学農林社会経済研究	6. 最初と最後の頁 1- 44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） info:doi/10.15068/00154857	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 渡部圭一・芳賀和樹・加藤衛弘	4. 巻 第 33 号
2. 論文標題 明治中期阿仁鉱山をめぐる山麓村の林産物請負生産：旧秋田藩領荒瀬村肝煎・湊家文書の解題と翻刻	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 筑波大学農林社会経済研究	6. 最初と最後の頁 1-72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） info:doi/10.15068/00152010	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 芳賀和樹	4. 巻 963号
2. 論文標題 秋田藩の林政と山林資源管理技術	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 歴史学研究	6. 最初と最後の頁 78-87
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 加藤衛拡	4. 巻 第70巻第12号
2. 論文標題 近代治山治水事業の展開と林業革命	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 林業経済	6. 最初と最後の頁 3-9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) info:doi.org/10.19013/rinrin.70.12_3	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 渡部圭一・芳賀和樹・福田 恵・湯澤規子・加藤衛拡	4. 巻 (32)
2. 論文標題 公務日記にみる近代村の成立過程 秋田藩領荒瀬村肝煎・湊家文書の解題と翻刻	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 筑波大学農林社会経済研究	6. 最初と最後の頁 1-67
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) info:doi/10.15068/00146076	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 芳賀和樹	4. 巻 (51)
2. 論文標題 秋田藩における御札山の管理・利用	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 徳川林政史研究所研究紀要	6. 最初と最後の頁 81-104
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 福田 恵	4. 巻 (52)
2. 論文標題 近代山村における林業移動と人的関係網：広狭域に及ぶ山村像の把握に向けて	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 年報 村落社会研究	6. 最初と最後の頁 95-144
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 渡部 圭一, 芳賀 和樹, 福田 恵, 湯澤 規子, 加藤 衛弘	4. 巻 31号
2. 論文標題 阿仁川上流域における村社会と耕地管理:秋田藩領荒瀬村肝煎・湊家文書の解題と翻刻	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 筑波大学農林社会経済研究	6. 最初と最後の頁 1-56
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) info:doi/10.15068/00137474	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 芳賀 和樹, 渡部 圭一, 加藤 衛弘	4. 巻 50号
2. 論文標題 阿仁銅山山麓における森林資源利用の均衡と対抗	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 徳川林政史研究所研究紀要	6. 最初と最後の頁 159-179
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 芳賀 和樹	4. 巻 50号
2. 論文標題 秋田藩における19世紀林政改革の基調:「山林取立」政策を中心に	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 徳川林政史研究所研究紀要	6. 最初と最後の頁 109-129
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -



〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 芳賀和樹
2. 発表標題 秋田藩横手御城付山林の管理と利用
3. 学会等名 第131回日本森林学会大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 福田 恵
2. 発表標題 人の『移動』からみた農山漁村：村落研究の新たな地平を目指して
3. 学会等名 日本村落研究学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 福田 恵
2. 発表標題 「資源」を介した人の移動と村落研究の可能性：出稼ぎ・集落移転・農村
3. 学会等名 日本村落研究学会関西東海地区・中国四国地区合同研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 芳賀和樹
2. 発表標題 秋田藩の林政と山林資源管理技術
3. 学会等名 2017年度歴史学研究会大会近世史部会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 加藤衛拓
2. 発表標題 近代治山治水事業の展開と林業革命
3. 学会等名 林業経済研究所創立70周年記念シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 加藤衛拓
2. 発表標題 武蔵国西部山村における生業の展開と景観の変遷
3. 学会等名 歴史地理学会（招待講演）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 福田 恵
2. 発表標題 戦前期日本における「農村社会学」の成立・展開過程の再検討(5) - 農村社会学の「狭域」化と「広域」論の可能性 -
3. 学会等名 日本社会学会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 芳賀 和樹
2. 発表標題 秋田藩御山守の基礎的考察
3. 学会等名 日本農業史学会研究報告会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 福田 恵
2. 発表標題 林業移動と人的関係網 山村像をめぐる社会学からのメッセージ
3. 学会等名 地理科学学会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 湯澤規子	4. 発行年 2017年
2. 出版社 名古屋大学出版会	5. 総ページ数 (216-235) 339
3. 書名 教育と労働（中西聡編『経済社会の歴史：生活からの経済史入門』）	

1. 著者名 福田 恵	4. 発行年 2016年
2. 出版社 農林統計出版	5. 総ページ数 313(201-218)
3. 書名 共生社会 - 共生社会をつくる(集落社会における共生の問題系 - 自然資源と人的移動をめぐる一試論)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	渡部 圭一  (WATANABE Keiichi)  (80454081)	滋賀県立琵琶湖博物館・研究部・主任学芸員   (84202)	

## 6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	芳賀 和樹 (HAGA Kazuki) (00566523)	東京大学・大学院農学生命科学研究科（農学部）・助教  (12601)	
研究分担者	福田 恵 (FUKUDA Satoshi) (50454468)	広島大学・総合科学研究科・准教授  (15401)	
研究分担者	湯澤 規子 (YUZAWA Noriko) (20409494)	法政大学・人間環境学部・教授  (32675)	